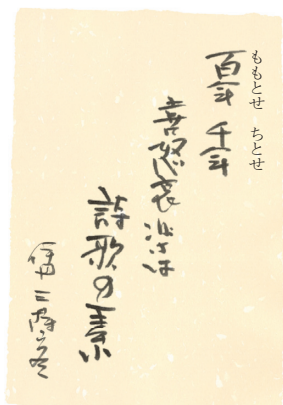


# 喜怒哀楽

Vol. 100  
10-11

「喜怒哀楽」は、文芸を楽しむ方々の活力の源を目指し(株)ミューズ・コーポレーション喜怒哀楽書房が隔月発行している情報誌です。



98歳の俳人 伊丹三樹彦さんより100号を記念して祝句をいただきました。

CONTENTS

俺たちのまのあたり句会(東京都・港区) 2〜3

情報誌「喜怒哀楽」の思い出 9

詠み人の『リレーエッセイ』川柳作家 柳本々々々 16

## 「喜怒哀楽」100号の感謝と新たな旅立ち

〜101号より無料にてお届けいたします〜

2002年4月、「喜怒哀楽」は誕生しました。

前年に亡くなった母を偲んで作った『忘れな草〜大好きな奈那子さんに捧ぐ』という追悼集を、抱きしめて寝ていた。父がいたことを後で耳にし、売れる本というよりも生きるよすがとなるような、本当に喜んでもらえる本を作っていこう、と思ったことが喜怒哀楽書房の始まりでした。

ただ、そうは思ってもお客さまはどこにいるのやら見当もつかず。でも、何かを発信しなければ存在しないと同じ。であれば、誰もが気軽に立ち寄れるコミュニケーションの「広場」を提供していこうと誕生したのが、この詠み人応援マガジン「喜怒哀楽」でした。

当初はA3サイズの紙1枚を2つ折りにした4ページ。当社から発信した一方通行の無料の情報誌でした。アンケートの返信はもちろんゼロ。その後は2、3通。俳句・短歌・川柳をご投稿いただく「作品紹介」のコーナーも、最初は5名からのスタートでしたが、お仲間も増え、総ページも6、8、12ページと増え、現在の16ページに至りました。

このまま読者数も、ページ数も増えようと無料では限界があるのでは、ということと3年前の2015年2月(78号)より、送料として1年1000円を頂戴することとしました。続けていくための選択でした。創刊から16年、今回おかげさまで100号を迎えることができました。改めて、この場をお借りして伏して感謝申し上げます。

100号という節目を迎え、今後の「喜怒哀楽」はどうあるべきかを自問したとき、当初の想いと「喜怒哀楽」は軌を一にして歩んできた、当社の歩みそのものだと思ふに至りました。

同時に、社内より創刊当初の志に立ち返ろうという声が上ががり、より多くの方が集いやすいよう送料はただか、無料にて継続発行することとしました。

今後は、最初に抱いた気持ち、生きるよすがとなるような、本当に喜んでいただける本をより多く作っていくべく、「喜怒哀楽」がその広場足り得る情報誌となるよう、力を尽くしていく所存です。どうかご理解のうえ、これからも、今まで以上に「広場」へのご参加とご提案をいただけますよう、よろしくお願い申し上げます。これまでのご協力に心より感謝し御礼申し上げます。

喜怒哀楽書房 木戸敦子



# 俺たちの まのあたり句会

(東京都港区)

中原道夫(「銀化」主宰、榮猿丸(「澤」同人)、関悦史(「豈」同人)、高柳克弘(「鷹」編集長)



▲10月10日に20周年を迎えた「銀化」主宰中原道夫氏(右) 俳句王子こと「鷹」編集長で奥様は俳人の神野紗希さん、高柳克弘氏(左)

- ① 「ガラス」出題・中原道夫
- ② 「撫」出題・榮猿丸
- ③ 「グーグル」出題・関悦史
- ④ 「時」出題・高柳克弘
- ⑤ 「友」の計5題

◎まずは本人以外が採った3点句より  
**薔薇と捨つ我が血の付きしガラス片** 高柳

榮：血と薔薇でやりすぎだがナルシズムは悪くない。薔薇を活けた花瓶を割った、その片づけで指を切り血の付いたガラス片と一緒に捨てた。やりすぎも、この句の場合はいい方に出ている。好みの分かれる句。

9月16日(日)、NHK文化センター青山教室で行われた「俺たちのまのあたり句会」にお邪魔しました。前回の講師は、宇多喜代子、星野高士、岸本尚毅、權未知子。今回は中原道夫、榮猿丸、関悦史、高柳克弘といった豪華な顔ぶれの男性俳人をゲストに、選句・句評を「目の当たり」にしながら俳句を学ぶというエンターテイメント句会。各人より「最近感動したこと」を交えて自己紹介がなされ、それぞれの兼題で詠んできた句を互選、選評をします。

中原：今言われたように、血と薔薇は非常に近い、まずそこは指摘できる。俳句は一人称で作るのが基本的な了解、「我が」は省ける。ガラス片の鋭利なところに血もついて、花びらを一枚ずつ剥がしたエッジがとんがって巻かれているようなイメージも重なる。

関：俳句におけるガラスは、綺麗な物体としてかかれることが多い。それを「我が」として無理矢理自分に引き寄せた、この引きの強さ。バカにしているわけではなく(笑)、ガラスという無機質なものを自分に引き付けてこれだけかっこよくした。ナルシズムもあるが、クールで抑えがきいている。会場：自分でも作れそうな句だな、と(爆笑)。

高柳：プロとしてはちょっと物足りないでしょう(笑)。つき過ぎは気になったが、ベタな取り合わせでも取り合わせの面白さや、その結び付け方、ものの捉え方によって、新鮮な句を作れないかと考えてみた。



▲10月からNHK講座「俳句の窓」を始めた「澤」同人榮猿丸氏

## 文鳥は愛撫を拒み秋時雨

高柳

関：文鳥といえは可愛いと相場は決まっているが、それが愛撫を拒んでくるところに小さくて可愛いだけではない、生物としての意思ある文鳥が出てくる。外は秋時雨、愛情を注ぎたいが違和感や齟齬がある、ふられた男の方にもかっこよさがある、そんなシーンのような感じもして、不快ではない。

さっきの薔薇の句と同じでクールな手ごたえに落ち着いている。私は俳句で最初から感動を書くのは好きな方ではないが、この2句はどちらかというところ感動したことが先にあるが、俳句の作り方として、これだけ様になるものを作るのは意外と難しい。自分の感情に自分がおぼれて終わってしまう。作った結果として、自分はこんなことを考えていたのかと感動する、あとから分析して気が付くのが理想。

中原：私は3人の父親くらいの世代、昭和40年代頃、手乗り文鳥が流行った時期があった。いつもは慣れて肩に乗ったりしている文鳥が、時にヒステリックな状況になる。取りつく鳥のな

い気分が、うまく秋時雨に回収されている。一方で、秋時雨というメモロに情緒的なところにシエルターとして逃げ込んだのではないか、という反対



▲10月からNHK講座「土曜俳句倶楽部」を始めた「豈」同人関悦史氏

の見方もできるが、秋時雨をつけておけばそんなに瑕瑾はなく、全体としてうまくまとめた。

榮：この前後で、ドラマが立ち上がってくるような、想像をかきたてるいいワンシーンを描きとっている。小さな愛玩動物に拒まれる、小さくて硬い木の实のようなわだかまり、ひよつとしたら、この文鳥は彼女かもしれない。ちょっと肌寒い秋時雨、さっと影が差す、そういう心陰影をよく表している。よく言われるのは、室内は自分の内面の象徴。室内、そしてその外側に秋時雨、二重に封じ込められているような、逃げ場のない鬱屈した思いも感じられて、さすが俳句王子だなと(笑)。

## 赤とんぼ手配写真みな友の如し

関

高柳：手配写真をこういうふうにつまめるのかと、意表を突かれた。「みな友の如し」の意味を過剰にとると、犯罪を犯すような人も、普段何ともない生活を送っている我々も同じ人間、その境目は予想外に薄い、というメッセージ性の強い句になる。手配写真が卒業アルバムの写真にちよつと似ているなあとといった一瞬のふとした感慨なのだと思ふ。手配写真というどぎつとものを、赤とんぼが懐かしさを支え、全



体として日本の郊外の一典型のような印象を持って迫ってくる。

榮：一読して笑ったおもしろい句。赤とんぼは郷愁を誘う季語、そこに懐かしき友。この2つのイメージはとても近いが、その間に手配写真、このねじれ方がおもしろい。

中原：手配写真というドキッとした語句を赤とんぼが中和している。私は深読みが大好き。前科何犯という凶悪な連中、最低1、2回はムシヨに入っている。ムシヨでは友だちだったのではないか、ムシヨ友だちがまた出ているぞというバカバカしさに笑った(笑)。関：一言言っておきますと私は刑務所に入ったことはありません。制作動機は非常にくだらないがこんな点が入った。皆さんの鑑賞を聞いて実はい句なのかなと(笑)。

◎2点句

津波映像予告テロップ撫子映し 榮

関：震災をどう詠むか、俳人も結構ブレッシャーがかかっていた。津波映像というどぎつい映像が出るときに、見たくない人はここで切ってくださいという予告を出すものでしょうから、不穏なものを負った撫子になっていく。その辺りの、心理的ないろいろな動きを、ものというか、映像の在り方だけで、薄っぺらく書いて成立させている。その背後に現代の生活の巨大な変化というものを感じさせる。感動的なことを厚みをもってべったりとかいていないことで、効いている句。

高柳：かなり重い身につまされるテーマを、あえて軽く詠んでいる。重いテ

マを重い言葉で詠むと却ってその内容が伝わらないことがしばしば起こり得る。こういう軽い書き方だからこそ、読者に深くものを考えさせると感じた。

よく問題になるのは、テレビ映像の中に映った季語、例えば桜前線北上中といった桜を詠んで、季語として働くかどうかということ。その辺り、中原さんは？

中原：絵に描いた桃は、桃として扱っていいのか、という質問がきたとき、その絵の大きさに桃があったのだから、写生して色を塗って桃らしくなった紙の上に描かれた桃も一応季語として認めなければならぬだろうという立場をとっている。この撫子はこれでいい。

高柳：私もこの場合の撫子は季語としてとっていいと思う。絵の中の季語、なかなか難しいものではあるが、撫子で秋だと、穏やかな秋の日和を想像させる。その中で侵入してくる津波映像予告テロップが、まがまがしさを増し



▲2部では参加者全員の句が講評される

てくるのではないかと。榮：このモチーフは早い時期から書き留めていたが、発表するのにためらっていた。つい最近もこの映像が流れていて、「撫」の兼題で句ができなくて

ストックを使ってしまった(笑)。下五の「撫子映し」が字余りだが、ソファに座ったような座りのいい言葉より、逆に腰が浮いているような感じが合っているかもと作った。

グーグルにエロ・グロ・神ゴッドななかまど

高柳

中原：この兼題を聞いた時、出題者はいやなやつだなあと(笑)。昭和の前衛、アングラ文化のキャッチフレーズとしてエロ、グロ、ナンセンスがあったが、ナンセンスではなくゴッド、神器。「OKグーグル」で何でも調べてくれる、これがないと生きていけない、という人たちがいてほとんど神のような存在。ななかまどの真つ赤な映像が、十分効果をあげている。

榮：この句には大変感銘をうけたが、兼題が大変難しく、関さんに殺意すら感じた(笑)。グーグルは調べると何でもでてくるが、究極はこの3つなんじゃないかと思わせる断定の力がある。ナンセンスの部分に神をもつてきた皮肉も効いている。音とリズムもよく、Gの音、グーグル、グロ、ゴット、その間に口のエロ、グロ、ドのゴッド、ななかまど、今日の句の中で一番好きだった。

関：インターネットの普及で、根底から社会の変化が生じた、それに対して俳句はどういう対応ができるのか、プ

口の方々に作ってもらいたかった。

◎1点句

石膏像で割られしガラス秋高し 関  
リアガラス曇り縞なす雨月かな 榮  
撫ではじめ共食ひとなる水母かな 関  
くさじらみ猫撫ねぶで声に誘き寄す 中原  
大いなる空欄としてグーグル冷ゆ 榮  
真四角なる西瓜グーグルなる無意識 関  
パパ夜長おんなじ腕時計の奴 高柳

★その後、受講者46名が事前に投句した兼題「月」より各講師が選をし(各人10句うち特選1句には景品も)、すべての句を講評する。会場からの質問にも、俳壇の内幕や本音も交えてフランクにお答えいただくなど、紙面では紹介できないようなことも多々!! 砂かぶりの、まさに間近な場所では俳人たちの人柄に触れつつ、砂ならぬ、言葉のシャワーに浴することができるとおぼろげな3時間、あつという間のまのあたり句会でした。

\*

次回の開催は11月18日(日)、ゲストは今井聖、坊城俊樹、岸本葉子、大高翔の4名、受講者の兼題は「小春」。自分の句が組上にあがる楽しみと、目の当たりにできる句会の醍醐味、ぜひ味わってみてください。(木戸敦子)



photo by nagaishi

お申込みはNHKカルチャー青島教室まで TEL03(3475)1151

# 投稿作品

## 俳句

※誌面(都合上、300作品を超える投稿があった場合、掲載はお一人さま1作品、先着300名様までとさせていただきます。今回の投稿作品数は、251でした。  
※しめきり 2018年11月15日(木)まで ※作品は原稿どおりに掲載しております。

- 1 千飯といふ知恵あり昭和あり  
鈴木義雄(福島県)
- 2 顔中が綿菓子となり秋まつり  
環 順子(東京都)
- 3 願ひごと見つからぬまま星流る  
高崎登喜子(東京都)
- 4 少年の目が輝きて木の実落つ  
村田吉雄(東京都)
- 5 炎天下ミストを3分雷門  
松尾らん(東京都)
- 6 どんぐりに遠き記憶を拾ひけり  
内河邦久(東京都)
- 7 夏帽子真砂女の浜の波に会ふ  
古谷 力(東京都)
- 8 父母の思ひ出招き走馬灯  
有坂馨園(福島県)
- 9 生か死か否生と死の桜桃忌  
福岡 悟(東京都)
- 10 泣きながら草取る人や墓参り  
井上静夫(栃木県)
- 11 また君に会ひにゆく夏香焚けり  
佐々木素風(新潟県)
- 12 老いを止める薬はないか秋の風  
井原穂子(東京都)
- 13 芒原風のかたちに靡きけり  
川口 襄(埼玉県)
- 14 母の日に明治の妣の波乱知る  
山崎吉晴(群馬県)
- 15 鉢植への茄子の初採り仏壇に  
青木涼子(埼玉県)
- 16 縁先にうつとりと聴く秋の風  
大谷 茂(埼玉県)
- 17 新涼や通勤電車の日曜日  
三津木俊幸(千葉県)
- 18 新涼やちよいとそこ迄出掛るか  
吉村充治(埼玉県)
- 19 千屈菜や愛しきまでに沸いてきて  
西條公雄(埼玉県)
- 20 炎天も洒落をつくしてペアルック  
居原田暹(大阪府)
- 21 流し去る家族の記録夏出水  
長峰正晴(千葉県)
- 22 降り注ぐ火の粉川面に投げ松明  
杉原明子(静岡県)
- 23 何人も亡き人ふゆる天の川  
佐野和彦(静岡県)
- 24 掛持ちの長老忙し村祭  
小林七重(新潟県)
- 25 補聴器のしかと捕らえし蟬の声  
重原爽美(新潟県)
- 26 飽食や破れし國のくぢら汁  
小島岳青(新潟県)
- 27 公園に頭上おもたき蟬時雨  
片山茂子(埼玉県)
- 28 大空に溶けこむ色や紅芙蓉  
中嶋清子(佐賀県)
- 29 川底の魚影清し秋日差  
小澤円梨(静岡県)
- 30 竹に吊るCD板の鳥威  
光成高志(千葉県)
- 31 揺れたくて風を呼びしか曼珠沙華  
磯部 力(新潟県)
- 32 エビ反りで吐き出す勝利の校歌  
白松いちろう(千葉県)
- 33 病む右手ペン左手に夏書して  
堀木和子(大阪府)
- 34 孔子廟楹の双樹も紅黄葉  
津田卿雲(岡山県)
- 35 初めてのペディキュア孫と夏休み  
星 一子(神奈川県)
- 36 古都の風うなじにそつと夜の秋  
上村元義(神奈川県)
- 37 闇せまり灯ろう写す児童の絵  
塩崎須美子(神奈川県)
- 38 地藏会や幼き膝のみな揃ふ  
田中 昶(鳥取県)
- 39 月山や芭蕉も賞でし雪桜  
古閑智子(神奈川県)
- 40 西瓜成る眼の迷ふ収穫期  
溝畑美代子(埼玉県)
- 41 貧しさに耐えて忍ぶ春の夜  
湯浅暉子(石川県)
- 42 列をなす真夏の夜のだんご虫  
二瓶邦枝(埼玉県)
- 43 新米をつくりし人がかつぎ来て  
河野静子(埼玉県)
- 44 風鈴市有田の音にそばだてて  
田野倉くにお(東京都)
- 45 空蟬の残す人生喜寿祝い  
杉村美保子(岩手県)
- 46 朝顔の高さいろいろソファミレド  
天野輝子(東京都)
- 47 名月や忍びやかなる琴の音  
鈴木清子(埼玉県)
- 48 どやどやと大きな靴や夏休み  
堅田秀子(東京都)
- 49 富士見ゆる心も軽し秋の風  
清まさじ(静岡県)
- 50 涼しさの麒麟の長き睫毛かな  
高松玲子(埼玉県)
- 51 みんなの気怠さ残す朝かな  
川嶋法子(東京都)
- 52 狭庭の木々小さくゆれて秋めきぬ  
檜山柚子香(東京都)
- 53 野馬追や勝鬨の声嘶ゆ馬  
近藤薫也(千葉県)
- 54 天高しケータイ今も二つ折り  
坪田勝秀(鹿児島県)
- 55 一閃の流星を見し夜の不安  
大阿久雅子(埼玉県)
- 56 星月夜八ヶ岳の稜線あきらかに  
関山恵一(神奈川県)
- 57 平成の次は天恵法師蟬  
岩村 昇(神奈川県)
- 58 踏んばりの利かぬ残暑の心拍数  
本庄準也(埼玉県)
- 59 蟬の声共になきたき時もあり  
青木ケン子(埼玉県)
- 60 絵ろうそく灯し供養の盆座敷  
中田文子(大阪府)
- 61 眼光も爪も鋭し蟬の殻  
鏡たか子(山形県)
- 62 怪人に似たる形相夏の雲  
神 一男(静岡県)
- 63 よく笑ふことが酒癖銀杏の実  
湯浅芳郎(岡山県)
- 64 炎帝や祈りの町は原爆忌  
井上氣海(広島県)
- 65 稲の花越後三山美酒の旅  
吉里ひとみ(東京都)
- 66 秋立つや認知機能に活入る  
日名子春実(群馬県)
- 67 ジャンケンの後の正面梅雨晴間  
伊藤久枝(埼玉県)
- 68 集まるは老人ばかり震災忌  
岩田 信(神奈川県)



- 69 おいそれと死ぬ気はないぞ十葉干す  
佐藤よしと(北海道)
- 70 はんばない齡の作句盆の月  
大窪美代子(大阪府)
- 71 悠久の大河かがやく大花火  
宮崎見昭(埼玉県)
- 72 魚籠に入れ跳ねる天魚や雪解水  
間森 坦(兵庫県)
- 73 秋暑し雷門の異邦人  
齊藤安弘(神奈川県)
- 74 雲間より山湖に後の月明り  
津布久信雄(東京都)
- 75 生き甲斐は灯火親しむ免許返上  
大橋恒次(新潟県)
- 76 はまなすや海難碑立つ岬鼻  
梶 鴻風(北海道)
- 77 体温より高き外気や蝉時雨  
中野勝子(鹿児島県)
- 78 青空を流れる雲と秋桜  
平林義康(兵庫県)
- 79 笑はれてゐるかも油虫逃がし  
若林卓宣(三重県)
- 80 熱帯夜宙も青息吐息かな  
仁藤ひろし(埼玉県)
- 81 足裏見せ大の字で寝る帰省子や  
若月理依子(新潟県)
- 82 鳥雲に吾にも羽のありしかば  
阿部徳夫(宮城県)
- 83 送り火をたがいに黙し息子と二人  
金子範子(高知県)
- 84 熊駆除の緊急会議黍嵐  
一瀬正子(埼玉県)
- 85 爽やかなのひと言で今日がはじまる  
井田由利子(宮城県)
- 86 霧の街啄木の歌碑雨情の詩碑  
堀田寿美子(北海道)
- 87 カマキリと矢切の渡しに船に乗る  
松前邦広(千葉県)

- 88 下駄履のセピア写真や麦藁帽  
浦橋克行(兵庫県)
- 89 新豆腐ゆつくり会話しておりぬ  
白戸麻奈(東京都)
- 90 災害に生きてのがれしサンマ食ふ  
油谷博子(兵庫県)
- 91 ひねくれた大風進路ナメクヅリ  
大塚徳子(埼玉県)
- 92 夏の夜やひときわ光る赤い星  
田中恵美子(山形県)
- 93 玄関にはやばや灯す秋の暮  
水落重式(新潟県)
- 94 過疎地とは知らず螢の乱舞する  
木村 舳(山形県)
- 95 新米のとき水ゆつくり流しをり  
藪原保子(東京都)
- 96 モネの庭紫スイレン水鏡  
守安幹男(岡山県)
- 97 杭一つ争ふ塩辛とんぼかな  
村山徳英(埼玉県)
- 98 遠き音胸躍らせて秋祭り  
中川義彦(新潟県)
- 99 遠き日を囲む卓袱台とろろ汁  
寺内 佶(埼玉県)
- 100 再会は噴水広場夢を聴く  
永田歌子(埼玉県)
- 101 今日生くる命素直に吾亦紅  
道給一恵(埼玉県)
- 102 すくわれて望まぬすみか金魚鉢  
中村康浩(福岡県)
- 103 敗戦忌父母に涙の九月かな  
菅井文男(新潟県)
- 104 友よりの白桃匂ふ荷を解けり  
竹本美美子(新潟県)
- 105 丹波栗りすの尾っぽの見え隠れ  
菅原キイ子(宮城県)
- 106 蚊遣火や柩の前の明るるまで  
浅海和代(東京都)

- 107 大鍋のカレー蕩けし残暑かな  
椋本望生(大阪府)
- 108 横たはる牛に遊ぶや夏の蝶  
本間 進(新潟県)
- 109 孫の来て話尽きなき敬老日  
本間ミネ(新潟県)
- 110 花芒茫茫として落暉かな  
九法活恵(埼玉県)
- 111 止まり木に訛飛び新酒酌み合う  
清水君江(埼玉県)
- 112 庭草も必死に生きる酷暑かな  
中山日出子(大阪府)
- 113 車座の身振り手振りや豊の秋  
高垣勝代(大阪府)
- 114 球児らの汗と涙や夢を追ふ  
柴田恵美子(北海道)
- 115 月出て切絵のごとし献盃す  
安田芳江(茨城県)
- 116 故郷は日に日に遠く秋彼岸  
服部八重子(東京都)
- 117 空耳のこの頃多し萩の花  
沖 惇子(大阪府)
- 118 酷暑すぎコスモスにこり顔を出す  
長谷部喜代子(大阪府)

## 短歌

- 119 嬰児二人時経ず生れて五人から孫七  
人のわれらじじばば  
桑原謙一(群馬県)
- 120 出征の父に送りし色褪せた写真に幼  
い我也写りし  
関原幸子(東京都)
- 121 暑き日も経管栄養を受け乍ら脳腫  
瘍の娘逝きて八年  
中田妙子(東京都)
- 122 返納の催促うけし免許証分去れの道  
右か左か  
石尾曠師朗(東京都)
- 123 天売いう島のウトウは土工兵地に穴  
幾万沖繩戦見ゆ  
早坂絃司(北海道)
- 124 御仏の御加護うれしや十三の瞳輝く  
ムルアンの洞窟  
内藤明子(東京都)
- 125 順調に惚けていますと友に書く探し  
ても無い被保険者証  
黒澤正行(福島県)
- 126 「元氣なの」只それだけの電話でも  
声で通じる気持の嬉し  
峯岸信子(東京都)
- 127 日に灼けた古書が路上に捨てられい  
てひょうびょうとただ時わたりゆく  
北岡 晃(兵庫県)
- 128 アユや鱒登り下りし山の川日照続き  
で瀬々に水なし  
田中豊恵(新潟県)
- 129 龍安寺十五の石も一見えず枯山水に  
つくばい悟道  
宇都木安子(東京都)
- 130 炭坑絶えて黒きダイヤは消えさるも  
白きダイヤは香春に残る  
濱田イサオ(福岡県)
- 131 猛暑なり今在る命抱きしめて天変地  
異に我が行末  
合田浩子(茨城県)
- 132 たゆたゆと鳶は弧の舞い燕らは空を  
斬る舞い盆地は晴れて  
土屋喜雄(山梨県)
- 133 終戦を知らず台湾から引き揚げ船  
待つ暗い部屋私の戦争  
濱崎祥子(鹿児島県)



134 産れ来て初めに聴きし音あらば胎内に知る母の声かも  
寒川靖子(香川県)

135 ほどほどに老いていますと主治医言うほっともしたりがっくりもする  
岩崎政弘(岡山県)

136 パナマ帽そのなつかしさを被りたる農を嫌いし若き日の父  
青木日出男(群馬県)

137 ふたりの子とじゃんけんしながら駐車場のわごんにのりこむわかきははかな  
安部 哲(新潟県)

138 油ゼミころがる屍見て通る体の変調気づかないながら  
高橋登志子(新潟県)

139 立秋も過ぎて猛暑続く中虫の声聞きほっとする夜  
門田善二(兵庫県)

140 コスモスの静かにゆるる甲斐の地の向うに見ゆる案山子の畑  
中沢敬子(千葉県)

141 血をもちて購ひしものにあざればテッシュより軽き参政権か  
高橋卓二(新潟県)

142 娘の迎え五ヶ月ぶりに着きたれば小犬も倍に甘がみ迫る  
高須 孝(愛知県)

143 蛍追ひ敵機睨みし少年期今古里に螢は飛ばず  
久本にい地(岡山県)

144 臥す姉の部屋暗ければ窓を開け合わせ鏡に鯉戯り見す  
夏井寛治(新潟県)

145 七・八と百日咲きしさるすべりもも色まぶし大木に盛られ  
大鳥居牧子(東京都)

146 亡き母の好みし色のむらさきのクレマチス咲く命日のころ  
山田良男(埼玉県)

147 風鈴のやさしい音色に癒やされるその音さえもうるさいという  
坂元正憲(東京都)

148 七年半過ぎて今なお見つからず家と流され知人は何処  
早坂保文(宮城県)

149 江ノ島や白い波だな彼岸湖木の芽時桃の節句や雛祭  
五味田幸夫(東京都)

150 戯れに妻を背負いしこの気迫軽いものよと三歩前進  
島田實貴男(群馬県)

151 ささやかな幸せの日々天災が無惨にうばう被災地哀し  
岩崎令子(大阪府)

152 我が街で猛暑記録四十一・一日本で一番暑い住めば都です  
新井 賢(埼玉県)

川柳

153 神様の蹴鞠の逸れて流れ星  
丸山芳夫(東京都)

154 何とまあ裸の王様多いこと  
細川光子(栃木県)

155 見得を切りシラも切ります永田町  
橋本世紀男(東京都)

156 自分史の白紙に隠す尾骸骨  
松田重信(埼玉県)

157 ガアガアとラジオ流れる敗戦忌  
原 崇雄(埼玉県)

158 テレビ見て新聞さらに名古屋場所  
大場岬月(長野県)

159 紫陽花も米寿の顔となりける  
山口静一(東京都)

160 紅い爪死刑と決めた踊り食い  
木村洋一(新潟県)

161 よく救出みんな拝んだタイ洞窟  
石原 岳(群馬県)

162 不自由な友サポートしてる子が光る  
小山恵美子(大阪府)

163 核持って北鮮持つなといじめつけ  
守屋高雄(岩手県)

164 献立はスタチもらって秋刀魚買おう  
奥那於子(大阪府)

165 弱り目に大活字本ありがたや  
阿部 至(埼玉県)

166 人気なき家に帰って庭先の花弁待ちており  
渡部美代子(山形県)

167 恋患い水火も辞さぬ狂い咲き  
佐藤朗々(東京都)

168 すれ違う細いうなじに汗光る  
関本 守(新潟県)

169 死んだ気のしない倅子は側にいる  
大橋絵代(千葉県)

170 生き残りこの暑さ受けバチ当たり  
佐伯セツ子(香川県)

171 遊び方改革ですかカジノ法  
目黒豊光(福島県)

172 天気予報見るのが怖くなった夏  
長谷川庄二郎(千葉県)

177 気象庁は地震予報士育てねば  
伏見の馬酒(京都府)

フォトイック

こちらの写真を見て詠んでいただきました。



(写真提供：伊丹三樹彦さん)

178 炎昼を子どもは疲れ知らぬげに  
高崎登喜子(東京都)

179 幼な子の子守りをしてる鳩の群  
橋本世紀男(東京都)

180 幼児語でハトと対話の朝の景  
松田重信(埼玉県)

181 餌ねだる鳩に寄り来る異国の子  
関原幸子(東京都)

182 天空へ六道参る大地の子  
福岡 悟(東京都)

183 鳩とじゃれる金髪少女秋日和  
井原毬子(東京都)

184 国問わず子供やっぱりハトが好き  
石原 岳(群馬県)

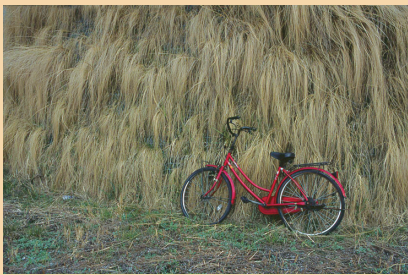
185 小春日や異人の双児鳩と遊ぶ  
山崎吉晴(群馬県)

186 今朝は見ぬ鳩にパンやる老夫婦  
小山恵美子(大阪府)

187 餌ねだる鳩の羽ばたき風薫る  
三津木俊幸(千葉県)



- 188 新涼や孫は三歳鳩と遊ぶ  
早乙女文子(埼玉県)
- 189 鳩追うて転ぶ赤ちゃん小春日和  
居原田暹(大阪府)
- 190 餌見つけしばし仲間はライバルに  
長峰正晴(千葉県)
- 191 外方むく鳩のあまたや夏の果  
佐野和彦(静岡県)
- 192 のどけしや鳩と投合して遊ぶ  
片山茂子(埼玉県)
- 193 小春日や子等まく餌に鳩の群  
小澤円梨(静岡県)
- 194 小春やベンチの前の鳩に子ら  
光成高志(千葉県)
- 195 鳩数羽帰る童心秋は来ぬ  
津田卿雲(岡山県)
- 196 鳩ぼっぽ平和つて素的だね  
星 一子(神奈川県)
- 197 子等と鳩コラボしている秋日和  
有田裕子(北海道)
- 198 お豆さんまいてやるからよつといで  
田中豊恵(新潟県)
- 199 あかたれくちばし怖いおとなです  
奥那於子(大阪府)
- 200 ワタシ鳩大ーい好きワタシもよ  
河野静子(埼玉県)
- 201 秋暑し豆が欲しいか鳩ぼっぽ  
天野輝子(東京都)
- 202 エブリワン世界の子等に平和贈  
宇都木安子(東京都)
- 203 夏ささず鳩も友達くるるまで  
堅田秀子(東京都)
- 204 鳩さんやぼくも仲間に遊んでね  
清まさし(静岡県)
- 205 子には子の進む道あり鳩吹けり  
近藤薫也(千葉県)
- 206 はとぼっぽ一緒に遊ぼうエサ上げる  
渡部美代子(山形県)
- 207 人も鳩も長き影もつ秋の苑  
大阿久雅子(埼玉県)
- 208 ボクだつておやつが欲しい幼児の日  
佐藤朗々(東京都)
- 209 鳩よりも雀が好きと我が妻は  
岩村 昇(神奈川県)
- 210 会話する鳩と幼児平和なり  
合田浩子(茨城県)
- 211 鳩と子の遊ぶ参道終戦日  
佐藤 信(神奈川県)
- 212 小鳥来る「世界の平和」きつと来る  
本庄準也(埼玉県)
- 213 このお豆食べて頂戴ハトポッポ  
鏡たか子(山形県)
- 214 幼な児の鳩と遊べる秋日和  
神 一男(静岡県)
- 215 共存する青い目黒い目鳩ぼっぽ  
濱崎祥子(鹿児島県)
- 216 ハトさんや残りの人生おしえてよ  
佐伯セツ子(香川県)
- 217 ハトさんもおなか空いたのかわいそ  
う  
岩崎政弘(岡山県)
- 218 鳩の目に餌撒く人が神佛  
青木日出男(群馬県)
- 219 鳩がパー幼女がグーで鳩の勝ち  
安部 哲(新潟県)
- 220 境内に親子とつどうハトの群  
高橋登志子(新潟県)
- 221 秋高し児等の歓喜が聞こえるよ  
日名子春実(群馬県)
- 222 鳩ことばわかるでしよねえ話そつよ  
高橋卓二(新潟県)
- 223 子には子の縄張りのあり日向ほこ  
佐藤よしと(北海道)
- 224 鳩も子も同じ広場の小春かな  
大窪美代子(大阪府)
- 225 鳩ポッポー豆よりほしい恋人だ  
齊藤安弘(神奈川県)
- 226 秋惜しむ上野の森の土偶展  
津布久信雄(東京都)
- 227 生類憐みの令想ふ子らの眼は  
北野耕兵(千葉県)
- 228 秋光や広場に遊ぶ子と鳩と  
梶 鴻風(北海道)
- 229 子と鳩を結ぶ広場や蝉時雨  
中野勝子(鹿児島県)
- 230 ハトさんにエサをちようだいする子  
ども  
長谷川庄二郎(千葉県)
- 231 ハト君やおまえも金髪お好きかえ  
仁藤ひろじ(埼玉県)
- 232 ねえみてよこんなにかいわたしの  
はねよ  
阿部澄江(宮城県)
- 233 さあおいでボクの背中で空飛ぼう  
阿部徳夫(宮城県)
- 234 秋天を支える子らの笑顔かな  
井田由利子(宮城県)
- 235 幼児の優しい心鳩も知る  
松前邦広(千葉県)
- 236 鳩のいる平和な街の公園で  
和崎治人(山口県)
- 237 子の笑顔鳩の仕種を喜びて  
水落重式(新潟県)
- 238 子と遊ぶ良寛さんを想起する  
久本にい地(岡山県)
- 239 幼な子よ天まで届け笑い声  
小林恵子(大阪府)
- 240 座る児に話しかけたる鳩の群れ  
倉沢登美子(静岡県)
- 241 幼と鳩仲良し同志日向ほこ  
村山徳英(埼玉県)
- 242 爽やかや鳩と戯る未来の子  
寺内 佶(埼玉県)
- 243 鳩は鳩子は子の願ひ小六月  
山田楽山(埼玉県)
- 244 未来まで自然と共に生きたいネ  
菅井文男(新潟県)
- 245 秋深し鳥語のつきぬ子の目線  
菅原キイ子(宮城県)
- 246 あたゝかや鳩と仲良し幼なき子  
浅海和代(東京都)
- 247 冷やかに鶏冠の動き見てをりぬ  
椋本望生(大阪府)
- 248 児ら鳩と遊ぶ境内秋日和  
本間 進(新潟県)
- 249 午後の日を鳩に任せてシャッター  
チャンス  
九法活恵(埼玉県)
- 250 爽やかに日の当るや鳩が飛ぶ  
五味田幸夫(東京都)
- 251 ほらおいで「こはんですよ」と声は  
ママ  
岩崎令子(大阪府)



俳句・川柳募集!!

(写真提供：中川三郎さん)

上の写真から、自由にイメージし五七五(俳句か川柳)で表現してください。応募はアンケートハガキ投稿欄にて。お待ちしております!



「投稿作品で心に残ったものは？」の問いに、たくさんのお返事をお寄せ頂きありがとうございました！その中で特に多くの評価を集めた作品と、それを選んだ理由の一部をご紹介します。  
※大賞と自句自解コーナーは年1回です。

◎短歌部門

23 戦争の惨禍に誓ひし九条の不戦厳守  
はこの国のかたち

村山徳英(埼玉県)

・政府は憲法改正を目論んでいるが、この歌の様に九条を守り平和な日本を存続していかなければと思う。関原幸子(東京都)・歌の通り。黒澤正行(福島県)・先行きに不安を感じる人が多いのではと思います。二度と過ちを繰り返してはなりません。宇都木安子(東京都)・いかなる戦争でもNO！大橋絵代(千葉県)・この国のかたちを壊そうとする人達に考え直してもらいたいです。安田芳江(茨城県)

31 被災地は猛暑の中で死ぬ思い政府は  
カジノと6増の狂

坂元正憲(東京都)

・おっしゃる通りと思います。被災された方々の苦しみを知っていますか政治家の皆さん!!自分の出世、嘘までついて何がカジノかと腹立たしい。中田妙子(東京都)・主権在民が政府に届かずじまい。どないしますか。北野耕兵(千葉県)・そのとおりです。国会議員は何を考えているのか、はがゆいです。中野勝子(鹿児島県)・被災地の現状を国会審議をあわせて作者の思いを訴えている一首、上の句を下の句が互に生きている。山田良男(埼玉県)

◎川柳部門

48 うるさいが元氣な妻がいてくれる

岩崎政弘(岡山県)

・元気でいてくれる妻。それだけで百点ですね。目黒豊光(福島県)・小生昨

年十月に妻を見送りました。木村洋一

(新潟県)・お元氣がなによりです。私は無口な夫を亡くして寂しいです。小山恵美子(大阪府)・妻が元氣でうるさい方が安心だ。松尾正一(岩手県)・どうして妻は「うるさい」のでしょうか。これも一つの愛妻川柳で元氣な妻に感謝ですね。長谷川庄二郎(千葉県)・口ではうるさいと云っているが心では感謝していると思います。大久保アヤ子(東京都)・何と口うるさい妻ですが寝込んだり、入院すると私の生活も困ります。和崎治人(山口県) ほか

32 宇宙から国境はない青い空

木村洋一(新潟県)

・清々しいですね。大きいですね!! 関本 守(新潟県)・大国が宇宙まで支配しようとしている。地球の国境もなければいい。濱崎祥子(鹿児島県)・広島は73回目の原爆の日でした。世界の平和を実現したいです。井上氣海(広島県)

◎俳句部門

79 祭り笛小さな村が動き出す

村田吉雄(東京都)

・村祭りの情景を「村が動き出す」の表出で成功。大谷 茂(埼玉県)・祭笛ひとつで村が動き出す。景が大きい。小から大、明るい。田中 昶(鳥取県)・過疎化しつつある閑かな村の沸き立つ景が見えます。川嶋法子(東京都)・村祭りの楽しい雰囲気を感じます。松前邦広(千葉県)・祭り笛が聞こえてくると静かだった村が活気づいてきます。水落重式(新潟県)・日頃は静

かな村も祭りとなれば元氣そのもの。

祭りにはそんなパワーがありますね。中川義彦(新潟県)・祭り笛が聞こえる様になり村も活気が出てきたのでしょうか。「村が動き出す」の措辞が良い。寺内 侘(埼玉県)・祭り笛に小さな村が動き出したという表現がとても上手いと思いました。清水君江(埼玉県) ほか

131 口喧嘩できる日あり桜餅

佐野和彦(静岡県)

・主人がすごく大人で私がワアワア云つても「そうか、そうか」と相手にしてもらえなかった日々を想い出しうらやましく、いい御夫婦と思います。井原穂子(東京都)・喧嘩出来るのは元氣で仲好しの証拠、大いに喧嘩して長生きして下さい。岩村 昇(神奈川県)・口げんかのできる幸せ、が良いですね。佐藤 信(神奈川県)・私共もお互いに耳遠くなり怒鳴りごえ多くいけませんね。年だから仕方ないかア：神 一男(静岡県)・妻の七回忌、在りし日が懐かしく思い浮びました。守安 幹男(岡山県)

◎フォトイック

今回大賞はありませんでした。

◎他にも

4 免許証返納済みで戻されし用済みの  
穴妙に淋しく

宇都木安子(東京都)

10 抱きたいの思いかかわぬ亡き妻へひ  
孫供える花に手を添う

安守幹男(岡山県)

36 正直の文字を政府にぶつけたい

原 崇雄(埼玉県)

40 割勘で下戸も酒豪の仲間入り

長谷川庄二郎(千葉県)

57 校歌高らか米寿の集ふ風薫る

田野倉くにお(東京都)

59 人の世をしなやかに生き合飲の花

井原穂子(東京都)

67 申し分なき炎暑なり忍一字

内河邦久(東京都)

73 原爆の日よ人間に人になれ

福岡 悟(東京都)

85 広げては畳む終活夏座敷

日名子春実(群馬県)

113 草とるもとらぬも勝手老いならば

長峰正晴(千葉県)

120 青鷲も吾を觀察してをりぬ

吉里ひとみ(東京都)

152 秘密基地おやつは森のさくらんぼ

中村康浩(福岡県)

168 すこやかに昭和と一栢桐の花

大窪美代子(大阪府)

176 ドロップにわだかまり溶け虹立て

清水君江(埼玉県)

179 風薫る小江戸に多き異邦人

永田歌子(埼玉県)

191 幸せは目と鼻の先でんと虫

高崎登喜子(東京都)

215 この写真私が主役天道虫

松前邦広(千葉県)

222 一匹じゃサンバのリズムさみしいね

佐伯セツ子(香川県)

※今後もふるってご投稿をお願いいたします！





## Q 前回のアンケート 詠み人応援マガジン 「喜怒哀楽」の思い出を 教えてください。

・我が家に舞い込んだ最初の一通以来、十五年以上！一度も投稿を欠かしたことはありません

井上静夫(栃木県)

・自分の俳句が活字になった時は幸せを噛みしめました

溝畑美代子(埼玉県)

・投稿作品が初めて喜怒哀楽に掲載された時の感動 久保壽雄(北海道)

・二年前マガジンに載った句を見て、あの頃こんな句を作ったのかと思ひ出した

岩田 信(神奈川県)

・「笑顔礼讃西東」で拙著をとりあげていただいたのがきっかけで、読者の方との交流が深まりつつあります

橋本世紀男(東京都)

・「爽樹」の研修旅行を取り上げて下さいました。木戸さんと初めて言葉

を交したのもこの時

一瀬正子(埼玉県)

昨年私の所属する「蓮田川柳の会」

を本誌で紹介戴いたこと

松田重信(埼玉県)

・丁度10年前、木戸編集長と初対面！40号の「笑顔礼讃西東」に載ったこと！

仁藤ひろじ(埼玉県)

・俳句で大賞をいただき写真が掲載された。少し若い自分

湯浅芳郎(岡山県)

・うん！何だろう。俳句で選を頂いたことかな？

椋本望生(大阪府)

・心に残った作品(短歌)に選ばれたこと

寒川靖子(香川県)

・心に残った作品に何と自分が取り上げられたこと

本間 進(新潟県)

・心に残った作品に選ばれ少し自信が湧いた

久本にい地(岡山県)

・創刊時から愛読しています。「心に残った作品」に載せていただいたときは、うれしかったなあ…

若月理依子(新潟県)

・創刊に近かった頃の心に残った作品のお取り上げ、六・七月号「29」への読後感掲載に感激

有坂馨園(福島県)

・心に残った作品にコメントあるいはその作品が載った時はいつもビールで家族で乾杯しました

阿部徳夫(宮城県)

・俳句部門で大賞をいただいたこと

村山徳英(埼玉県)

・私が紹介した人の句もみつけてよるこんでます

油谷博子(兵庫県)

・とにかく若き日の友の健在ぶりを知るよすが—これがいちばん嬉しい

高橋卓二(新潟県)

・昔の句友の名前が二名ありなつかしく又元気を頂いて居ります

片山茂子(埼玉県)



▲vol.1 創刊号(2002年)  
A4 4ページ

・句会にもあまり出掛けられない齡になり、かつて一緒にやった方を数名紙上で見つけました。なつかしいです

寺内 信(埼玉県)

・清水英雄さんの投稿を見つげびっくりしました

井上氣海(広島県)

・知っている人の作品をみつけたときはびっくり、そして嬉しかった

佐藤 信(神奈川県)

・知人の句を見て「元気で活躍しているな」と毎回楽しみます

関山恵一(神奈川県)



▲vol.24 2006年。読者が増えました。発送数は約1900。

・転居した昔の俳句仲間の名前を見つけてやっていると懐かしく思った

長峰正晴(千葉県)

・友人の便りがなくても俳句でお元気なのがわかり安心します

浅海和代(東京都)

・友達の作品を見る楽しみがあり様子がわかったこと

山田楽山(埼玉県)

・同県の人や二、三人おられてうれい

坪田勝秀(鹿児島県)

・同県の方々が休むことなく投句しているのをみて励みになる

青木涼子(埼玉県)

・岩手県人の名前を見つけて

松尾正一(岩手県)



▲vol.37 2008年。赤い文字が読みづらくて、失敗。

・こちらから紹介させて頂いた方が毎回投稿され、会うこともなくなった今、楽しみにしております。同郷の方との縁も出来ました

吉村充治(埼玉県)

・いつまでもアホな川柳を出している友人。お元気である証しか

小島岳青(新潟県)

・遠くはなれた友も投句しています。お互いの句を電話で批評しあっています。毎号楽しみに待っております

金子範子(高知県)

・懐かしい友人の作品(俳句)を読むことのできる貴重な情報誌として愛読させていただいている

大谷 茂(埼玉県)

・高得点を頂いた時友人からすぐおめでとうのメールが届いた。また選評も真摯で感動したこと。紙面の方達とも一体感を持てる

高崎登喜子(東京都)

・叔母の紹介で仲間入りさせて頂いた

き、毎号お互いの作品で、コミュニケーションをとっています

細川光子(栃木県)





▲vol.46 2009年。温「古」知新がスタート。

- 句会でご一緒したことのある方の俳句を楽しみにしています
- 高松玲子(埼玉県)
- 知人、学友「喜怒哀楽」誌上での交流再開が嬉しい 天野輝子(東京都)
- 二歳上の姉も私が紹介して短歌を載せる様になり、また姉が自分の長女の義姉を紹介して入り電話でよくお互いの歌の事を話し合っています
- 関原幸子(東京都)
- 文通のご縁を頂いた方もでき感激しております
- 守安幹男(岡山県)
- 友と一緒に投稿出来た喜びをかみしめてます 大鳥居牧子(東京都)
- 短歌誌野径会の方の紹介で入会。短歌を詠みながら文字を書く、とても勉強になっています
- 田中豊恵(新潟県)
- 紹介した友人の句を見つけお互いに句作の励みになった
- 堀木和子(大阪府)
- 喜怒哀楽の読者の方より本をいただいたこと 中野勝子(鹿児島県)
- 鳥取県の田中昶さんは「日本海俳壇」に載っていて、名前を目にして見知らぬ人とは思えなかった
- 中村久仁子(京都府)
- 和歌を読んでいた叔母にプレゼント(94才) 喜ばれ、「いいね」と。教わ

- 「川柳港」の川田柳光会長(故人)から本誌の推せんあって今日に至ります
- 坂元正憲(東京都)
- vol.42号のお客様「リレーエッセイ」に句友からバトンを渡され投稿させて頂いた。その句友もさすがに亡くなられた 大阿久雅子(埼玉県)
- 十年ほど前、本紙の初回送付に驚いたこと。私の敬愛する方からの紹介として二度びつくり!
- 小林七重(新潟県)



▲vol.82 2015年より有料化。表紙だけカラーに。

- る声も(戦中のこと) 多いです
- 合田浩子(茨城県)
- こちらでお世話になり本を出した姉。田中美弥子の紹介で今に至っています。そして友を紹介して続けてくれます
- 小山恵美子(大阪府)
- 自由律俳句の仲間が参加し、心強く思った 白松いちろう(千葉県)
- 「喜怒哀楽」をお教え頂いた母方の親類で天野輝子様句の第一に楽しみに見せてもらっています
- 古閑智子(神奈川県)
- 故小暮昭司君に誘われて貴誌を読むようになった事と短歌を始めた事です。彼は便りの最後にならず一首歌っておりまして
- 新井 賢(埼玉県)

- 友人から紹介されて、いい本に出会ったと感謝しています。短歌人口が少なく淋しいです 濱崎祥子(鹿児島県)
- 岩村 昇(神奈川県)
- 今でも彼との会話を夢みます
- 残念の極みです。昨秋身罷られました。貴誌を奨められて以来の御縁ですが氏は
- 大久保アヤ子(東京都)
- 羽根田明氏から貴誌を奨められて以来の御縁ですが氏は
- 水落重式(新潟県)
- 紹介して下さった小学校時代の友人と何年も投稿しています。大事な友情
- 奥那於子(大阪府)
- 数年前より俳句の針ヶ谷先生より紹介されて以来ずっとつづけております。喜怒哀楽の本、私の生き甲斐です
- 中村康浩(福岡県)
- 私に貴社と情報誌との出会いをくれた人。今は故人に、返す返すも惜しい人でした 目黒豊光(福島県)
- 私に紹介してくれた人はなくなりましたが私は楽しく続けています



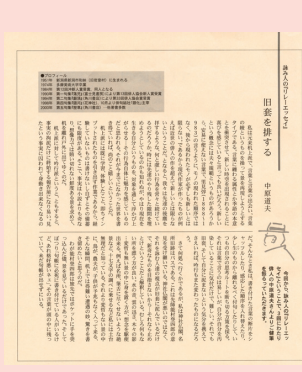
▲vol.87 2016年。なつかしい遊び・玩具シリーズのしおり付きでした。



▲vol.40 「詠み人スクランブル」文字がまだまだ小さく…。



▲vol.40 「お客様のリレーエッセイ」第1回(右上)。投稿作品のページ(左)も充実し、総ページは12Pに。



▲vol.30 「詠み人のリレーエッセイ」がスタート

プレイバック喜怒哀楽  
コーナー誕生時の様子、懐かしのあのコーナーも!



▲vol.92 2017年。全ページがカラー化。

- ・初めて投句したのが貴誌です。楽しんでいきます。群馬県の友人にすすめました 関本 守(新潟県)
- ・喜怒哀楽が届くと先師の藤沢樹村(青枇杷)氏のこと、その仲間のことを思い出します 近藤薫也(千葉県)
- ・病院で寺尾さまにお逢いして喜怒哀楽とのご縁が生れもう八年以上。月日の巡りの早さと、その後の寺尾さんを想いつつ 中田妙子(東京都)
- ・回を重ねるうちにお馴染みの名前も殖えて探す楽しみを感じています 日名子春実(群馬県)
- ・3年前の「喜怒哀楽」4月に俳人の中原道夫氏、8月には神野紗希さんが登場。とても驚き嬉しく、そんな事もありマガジンはやめられない！ 井田由利子(宮城県)
- ・「vol.95」の川柳26の「九十を過ぎて急ぐこと何もない」人どうしてるかなあ 原 崇雄(埼玉県)
- ・vol.83・vol.99厚さ15cm増えていく「喜怒哀楽」が思い出を作っています 宇都木安子(東京都)
- ・喜怒哀楽書房さんをご案内いただいてまる一年たちました。お若い方々が真摯に言葉に向き合っている姿勢に感動しました 戴原保子(東京都)

- ・いつも生徒に「業根譚」を読んで聞かせて道徳教育をしています。ありがとうございます 阿部澄江(宮城県)
- ・川柳も短歌や俳句と同じ「五・七」の文芸ということが並べて読むと勉強になります 長谷川庄二郎(千葉県)
- ・年を重ねても前向きの姿勢の方が多くいらっしやること見習うべきと 木村 舩(山形県)
- ・新潟出身の方の「にいがた文化の記憶館」で人物を見直している 夏井寛治(新潟県)



▲vol.97 2018年。さらにリニューアル。

- ・神奈川の齋藤安弘氏のお名前に深夜放送が懐かしい 吉里ひとみ(東京都)
- ・どこかで、だれかが、読んでくれていると総合雑誌をみて気づいたりします 安部 哲(新潟県)
- ・北の国から南まで喜怒哀楽沢山の文面のぬくもりにつつまれ数十年、倅な毎日に感謝しています 堅田秀子(東京都)
- ・一年間だけの積りが五年もなります。諸先輩の生き方や取り組みかたが参考になる。楽しい教科書です 本庄準也(埼玉県)

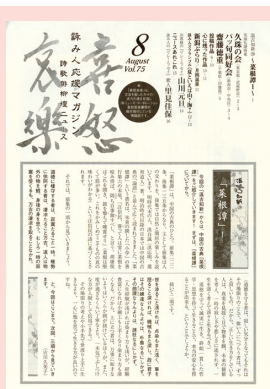
- ・「新潟ぶらり」を読み新潟に行つて来ました。(紅葉時) 鈴木義雄(福島県)
- ・貴マガジンを飾る「温古知新」に何度こころ打たれたか低頭 福岡 悟(東京都)
- ・白黒の冊子からカラーに変わり、レイアウトも工夫され美しくなったこと 有島和子(東京都)
- ・毎号手にとる度に垢抜けて、眼を楽しませてくれます。また箴言数多の「しおり」を俳句集に挟み大切にしています 古谷 力(東京都)
- ・フォト一句、アンケートと内容が増えた。紙質が良くなり、彩が豊になった 星 一子(神奈川県)
- ・平成十七年初めて電話した時の「親切」「ていねい」「やさしさ」に感激忘れられません 内河邦久(東京都)
- ・同人だった人にこのマガジンを紹介され背中を押され、編集発刊を助けて下さった皆様の思い出 倉沢ひとみ(静岡県)
- ・「天に咲く花」作成いただいた事(立派に) 峯岸信子(東京都)
- ・初めての句集製作をお願いした。このことがきっかけでした。十年をこえました 齊藤安弘(神奈川県)
- ・思い出を書ける程古くないので続けて読めたらよいなあと思っています 張山てる子(東京都)



▲vol.91 「笑顔礼讃西東」で史上最も遠くの岡山へ！！



▲vol.75 温「古」知新で長編「業根譚」がスタート。



▲vol.70 「10周年特別企画」ページも4回にわたり掲載。



▲vol.45 弊社社長による連載もありました。



2004年8月号（vol.15）より、当社で本を作ってください方々をインタビューする「笑顔礼讃西東」というコーナーを始めました。それまでは原稿を依頼し、お答えいただく形での掲載でしたが、紋切り型になり、その方の想いや人となり生き生きと伝わってこなかったりと、歯がゆさを感じていました。直にお話を聞きすると、どなたのお話も意義深く、多くの示唆をいただきました。鬼籍に入られた方も少なくありませんが、なぜ人は何かを書こう、本をまとめようと思うのでしょうか。皆さまの残してくださった言葉より――。

## ◆東久留米の故清水敏雄さん 2004年8月号

「人間ってというのは安易な方に流れるのが自然ですから。でも確実に毎日著しく退化しています。考えることをしないと、と思ったわけです。今ならまだ書くことはできるし、一念発起して挑戦しました」

◎最初にご登場いただいたのは、悪性リンパ腫と並走しながら『私達の参戦記-北支の対中共戦』をまとめた清水さん。終生第一の事件を後世に長く伝えたくて記した、の言葉が印象的でした。



## ◆横浜市の小林勝さん 2010年8月号

「特に感慨もなく70歳を迎えたが、高校の同級生の1割にあたる50人近くが亡くなった。父の亡くなった歳を越え、自分が今をどう生きているのか、何らかの形でまとめ報告したい気持ちになった」

◎同年代の死に触れる機会が多くなり、自分なりに毎日を大切に丁寧に生きなければと思い始めた、と。数多くの歌を『アンダンテ』（音楽用語で歩く速さで）という歌集にまとめられました。

## ◆日立市の反町正美さん 2011年2月号

「きちんと箱に入れて遺してある原稿類を見て、何とかしたかったという父の想いを感じた。原稿をまとめながら、こんなことを考えていたのか、と改めて会話をしているような息子としての貴重な時間だった。長い宿題を終えたような、晴れやかな気持ち」

◎お父様が亡くなられて30年の節目に遺歌集『金盞花』をまとめられた反町さん。自分のルーツをたどるような旅でした、とも。見つけた箱は未来へと続く箱でした。

## ◆新潟市の横瀬功さん 2011年8月号

「英国人のジョンソンという人が“おしゃべりは機敏な人をつくる、読書は人を深くする、書くことは人を正確

にする”と言っているが本当にそうだと思う。頭の中でキャッチボールをしたり、いろんな人を思い出したり、なかなか楽しい」

◎横瀬さんが退職する際、とうとう定年ですと挨拶すると先輩に「60、70代は人生の華よ」と言われたとのこと。人生の華が先にあることを、教えていただきました。

## ◆千葉市の片桐正雄さん 2012年6月号

「本を出す目的は書きためた原稿を整理・記録し、保存すること。古希を迎えた頃から、余命を考え“生きてきた証”として句集・歌集をまとめたいと思うようになった。ミニ自分史であり回顧録であり、自虐的懺悔録でもある。“滅ぶとも句歌集の中に我は生きなむ”の想い」

◎雪と百姓がいやで中学卒業とともに新潟を飛び出したあとは、あらゆる職業に就き、夜学に通い、都の職員となってからは寸暇を惜しんで勉強し管理職になったという片桐さん。

「ろくに勉強していない人間が自分の本を手にした時は夢のようだった」の言葉が甦ります。

## ◆千葉県山武郡の栗山ほなみさん 2012年2月号

「母は7月には自分で選んだホスピスに入り、庭を見たり自分史や短歌を作っていた。私に“ほら書かないと”とお尻を叩かれながら、家族へのメッセージの原稿は母の意識がしっかりしている最後に、私が聞き書きでメモしたもの」

◎自分史をまとめている最中に亡くなられ、後を継いで出版された娘さん。お母様の豪快な面と繊細さがほなみさんの中にしっかりと息づいていて、DNAの確かさを感じました。

## ◆尼崎市の伊丹三樹彦さん 2017年10月号

「人は死んだら灰になるだけや。この人はどんなことを考え生きていたかを形で残さんと。死んでからやなくて生きているうちに」

◎今まで見聞きした浅い経験からでも、同じことを感じます。人生は「愛と死と旅」と言い切った今98歳の伊丹さん。この言葉、胸に刻んでいます。

「喜怒哀楽」は小さな冊子です。でも記録し、形として残しているからこそ、改めてこうやって先達の言葉を反芻することができます。誰もが残せるもっとも美しいもの、それが言葉。

これからも、そう信じて皆さまのお力になりたいと思っています。(木戸敦子)



## 坂口安吾

—「無頼派」として自由を生きさせた作家

伊豆名 皓美

新潟を代表する作家の一人・坂口安吾(1906～1955)は、終戦直後に発表した『墮落論』・『白痴』で時代の寵児となりました。敗戦後の日本は、それまで何の疑いもなく認められていた伝統的なものの見方が一挙に崩れ去った時代でした。安吾は、随筆『墮落論』で「人間は生き、人間は落ちる。(略)戦争に負けたから落ちるのではないのだ。(略)落ちる道を落ちることによって、自分自身を発見し、救わなければならない」と説き戦時中の倫理観を否定しました。この力強く逆説的な論説は、主体的な生き方を示唆するもので、国民に大きな衝撃と影響を与えました。その二か月後には『墮落論』の小説版ともいわれる『白痴』を発表、これらの作品により戦後文学の端緒が開かれ、安吾は文学史にその名を刻むことになるのです。

坂口安吾は、新潟市西大畑町に父仁一郎と母アサの五男として生まれました。父は新潟新聞社(新潟日報社の前身)社長、衆議院議員の名士であり、漢詩人(号・五峰)としても有名でした。丙午(ひのえうま・へいご)の年に生まれたので、炳吾と名付けられました。「炳」は明らかという意味

です。兄は新潟日報社社長を務めた坂口献吉(けんきち)です。1919(大正8)年、新潟中学校(現新潟高校)に入学しましたがあまり学校に行かず、日本海の浜辺でひとり思索にふける少年でした。漢文の教師に「自己に暗い奴だから炳吾よりもアングと名のれ」と黒板に「暗吾」と書かれたことで「安吾」というペンネームが誕生しました。結局新潟中学校は退学し、東京の中学校に編入しました。その後東洋大学哲学科を卒業し、1931(昭和6)年、25歳で文壇デビューします。安吾の創作の幅は広く、純文学、幻想小説、推理小説、歴史小説、エッセイ・評論、ルポルタージュなど多くの作品を残しました。

安吾の他に、太宰治、織田作之助、檀一雄ら、当時既成の文壇に反抗した同世代の作家たちは「無頼派」と呼ばれました。これはフランス語の「リベラタン(libertain)」の訳で、何事にもとらわれることなく生きる「自由人」という意味です。作品内容の傾向というよりは、これら作家の生きざまを形容した言葉です。安吾は人間の自由な生き方を抑制するもの、そのような権威のすべてに反抗しました。作家でありながら、伝統的な漢詩文や和歌の世界、あるいは近代の小説や詩歌であろうと、取り澄ました「文学」という上からの権威を否定しました。文学を志す者ならだれもが目指すのが芥川賞や直木賞ですが、安吾は「純文学」とか「大衆文学」などという垣根を取り払い、自由な「ものかき」であろうとしたのです。



▲坂口安吾

### 【展覧会情報】

#### 企画展示「ポーダレス文学世界

吉屋信子・坂口安吾・山岡荘八

会期：11月23日(金・祝)から1月20日(日)

休館日：月曜日(祝日の場合は翌日休館) 12月28日～1月3日

## お洒落な「衣被」です

岩田 桂

衣被を「きぬかつぎ」と読みます。秋の季語です。小さめの皮付き里芋のことで、皮ごと湯がき、皮を剥いて塩をつけて食べます。

衣被（きぬかつぎ）とは、昔の女性が頭と顔を隠すためにかけた布のこと。その布がスリリと取れて、白い肌が現れる様子に似ている所から付けられたという。何と艶かしい名前ではないですか。

それにしても先人たちは結構、洒落た名前を付けたものです。ですから「なんだァ」、里芋か」などと軽んじてはいけません。軽んじると何時かこの衣被で泣くことになります。里芋は低カロリーで、捻挫、神経痛、火傷等に対する薬効があるからです。

しかも食べ始めたなら、止められない、止まらないの旨さです。皮がつるつるむけて、中は熱々のほくほく。皮の塩加減がほどよくいくつでもいけてしまふ。お酒がまためちやくちや美味しい。とくに中秋の名月には、なくてはならない野趣溢れたお供えモノです。月見酒の摘み食いに実に良く合います。芋名月の由来はここからきています。特に女性達は今生の幸せ感覚のお茶請けとして、こよなく愛しています。

芋名月娘ら食べてよく笑ふ

この里芋は、ここ新潟でも盛んに栽培されています。新潟は里芋のまほろばと言えなくもない。とくに五泉の里芋は群を抜いている優れものです。五泉の肥沃な河川の大地がもたらした帛乙女きぬおとめという女性名詞のブランドです。肉質が絹のように細かいからその名がついた。



また里芋と言うくらいだから日本の里の数だけ、様々な栽培がなされているのが里芋界の勢力範囲です。言うなれば農村の命を支えてきたのが里芋のエリアと云えます。

この里芋は畑から掘り起こした後、親芋と小芋を分けて小芋だけを大きな樽に入れます。さらにその樽に水を入れ洗濯板を差し込んで、小芋同士をゴシゴシかき混ぜます。

すると瞬間に小芋は磨かれて真白な肌に仕上がります。「芋を洗うようだ」という古事はここから来ています。

この作業はもっぱらボクらの仕事で、結構面白かった記憶があります。水車で芋を洗う家もありました。まさに日本の原風景です。この磨き上げられた小芋が衣被の原料となります。

しかしボクらの子供の頃は、どちらかといえば苦手な食べ物でした。里芋のあの「ぬめり」が苦手だからです。ぬめりの素はガラクトンという脳細胞を活性化する優れものです。

箸で挟んでも、つるりと逃げ出してしまふ里芋には、敵愾心すら生まれました。「この野郎、ボクの言う事を聞け」と追いかけて回すこともしばしばです。親の敵は里芋などと、訳の分からぬ事を言う変人も現れたりします。

里芋のつるつるりつるりつるり

それでも「ただいま！」と空きつ腹で学校から帰ると、この小芋がおやつ代わりに卓上に置いてあります。仕方なしに、急いで皮ごと口に放り込んで腹こしらえし、チャンバラごっここの剣士に早変わりして家を飛び出します。そして芋腹の鞍馬天狗や笛吹き童子となり町内を駆け巡りました。

貧しかったけれど、楽しかった子供のころの思い出です。だから衣被には頭が上がりません。何分にも鞍馬天狗のおやつだったからです（古いなあ）。

芋つかみ鞍馬天狗となりゆけり

しかも最近の料亭では、湯がきたての衣被が出たります。

「お客さん、とれたての小芋ですよ。熱いうちにお食べやす」とすすめてくれます。引き寄せてみると何とかの衣被ではありませんか。嬉しかったですねえ。土の香りが残っていて「おい、お前、生きていたのか！」と、言葉をかけてなくなる出会いです。そして皮の服を丁寧に脱がしながら、そのままシンプルに食べる贅沢を五〇年ぶりに味わいました。タイムスリップした出会いとは、こんなコトを言うのでしょうか。

ちなみにこの料亭では、おやじさんが作る芋料理に多くの芋ファンがついています。中でも里芋料理の定番といえば「煮ころがし」に尽きるが、それだけではありません。

以下がそのメニュー例です。

○筑前煮 ○芋煮鍋 ○里芋カレー ○里芋ご飯

○里芋の揚げ出し ○里芋と烏賊の煮物

○里芋羊羹 ○里芋コロッケ ○里芋もち

○芋棒の鰯煮 ○けんちん汁 ○のっぺい汁

どれもこれも職人がなせる芋料理ばかりです。このメニューの中であなたはどれが好きですか？おふくろの味、新婚の味などの思入れはないですか。

里芋カレーなんかは、一度食べたら永遠に忘れられない美味しさですよ。しかも学校給食の一番人気メニューです。子ども達が競って完食すると聞きまます。天皇家にも献上されたという噂もあります（まさか）。

そういえば、八坂神社近くの京名物の「芋ぼう」さんにも行きたいですね。海老芋を主体にした懐石料理が自慢の店です。職を辞してから、ゆつくりと行きたいひとところですよ。楽しみは残しておいたほうがいいからね！なぬ、早く行かないと死んじゃうって・ハイハイ！

花冷や芋ぼうさんの前を過ぐ



## 望郷の歌人山崎方代 山崎方代忌30周年

去る8月18日、甲府市右左口町の円楽寺において、郷土出身の歌人・山崎方代を偲ぶ第三十回方代忌が約70名の参加を得て行われました。読経後、中込敏雄実行委員長は「方代の人間性と歌の魅力を思う存分堪能してほしい」と話され、多数の来賓からも祝辞が述べられました。

アトラクションでは、地区文化協会読書部（田中千富美部長）8名が方代の随筆『青じその花』のスライド映像をバックに朗読すると、鎌倉の手広草庵時代の懐かしい情景が目には浮かび、大いに会場を湧かせました。続く記念講演では「朝霧」同人の歌人・伊藤亮氏が「わが心の山崎方代」と題し、戦争で視力を失いながらも、ひたすら歌作に励み秀歌を残した方代の人間性や、盲いた母や故郷への激しい思慕の念について、時に涙をぬぐいながら話をされました。また、氏は平成元年ふるさと創生事業の折、方代歌碑二十基を揮毫した書家でもあり、最後には方代歌「ふるさとの右左口郷は骨壺の底にゆられてわが帰る村」に合わせて自作した曲をハーモニカで演奏し、参加者も一緒に合唱するなど、方代を偲ぶ素晴らしい30周年となりました。



▲歌人であり書家でもある伊藤亮氏による記念講演

## 第9回 良寛・国上寺全国俳句大会開催

薄曇りの9月24日春分の日、国上寺（新潟県燕市）において、第9回良寛・国上寺全国俳句大会が開催されました。周辺を吟行後、13:15より句会開始。選者の「銀化」中原道夫主宰による事前応募句の大賞・入選・佳作の選評が行われました。

- |    |                   |      |
|----|-------------------|------|
| 大賞 | 佛教の伝はる速さかたつむり     | 山本規男 |
| 入選 | あまおとはまゆのなかにてききそめし | 矢野孝久 |
| 入選 | たましひを均して蛇は衣を脱ぐ    | 松居 舞 |
| 入選 | ピーマンの使はぬ部屋の広さかな   | 古藤欣也 |
| 入選 | ナマケモノだらけの夏の動物園    | 中村乎雲 |
- 続いて当日の吟行句（囑目2句）の選評が行われました。
- |    |               |      |
|----|---------------|------|
| 特選 | 大河永永富草をよけくねる  | 十見達也 |
| 特選 | 山門は秋思を食らふ頤か   | 恩田富太 |
| 特選 | 樹木葬ならば紅葉の頃にかな | 今井誠一 |

年々投稿者、参加者とも増えているこの大会。来年もご投稿いただき、秋のよき日に越後平野まで足をお運びください。



▲半数以上は新潟県外から参加くださいました！

## 新しいポストカードセットが誕生！

喜怒哀楽100号を記念して、新しいポストカードセットがお目見えします。作者は淡彩・花の絵会主宰丸山くみ子さん（東京都・あきるの市）。もともとは箸袋に描かれた茄子、赤かぶ、アスパラといった野菜の絵を、ポストカードに仕立て12枚セット1000円で販売します。今号に同封したはその中の赤かぶ。つい一杯飲みたくなるような、お腹がすいてくるような、そそられるシリーズです！



### スタッフの一言

Q. 詠み人応援マガジン「喜怒哀楽」の思い出を教えてください。

木戸 敦子



全く使ったこともなかったデザイン系パソコンMacで「喜怒哀楽」を作り、向こう見ずに当時入手した2000先に郵送したこと。現実を知らないというのは怖くもあり強くもあり。

古川 久美子



記事を書くため、いろいろなところに行った事もありました。普段行かないところにも。落谷虹児記念館の階段で正座の姿勢のまま滑り落ちたのも、今やいい思い出です（笑）。

菅 真理子



十年以上前のことになるでしょうか、「喜怒哀楽」読者の方からの返信はがきが100通を超え、スタッフみんな「やったー」と喜んでたこと。皆さま、ご愛読ありがとうございます。

披田 野裕美



返信アンケートを入力させて頂いているのですが、みなさんからの「夏祭りの思い出」を拝見していて、一つ一つ情景が思い浮かび、楽しい気持ちになりました。

木伏 美恵



以前「心に残った作品」の大賞に選ばれた読者の方にお電話で原稿依頼をしていました。緊張しながらお電話しましたが、皆さまご快諾くださり本当に嬉しかったです。

上村 眞智子



15年前の入社当時から「喜怒哀楽」のレイアウトでは各月ごとに嫌な汗をかいて時間と戦っています。初期のものは懐かしさと同時にデザインの拙さに恥ずかしくなりまた別な汗がでます。

石山 由希子



最初に「喜怒哀楽」に触れたのは入社当初、十余年前になります。社内の印刷機で印刷＆中綴じをした時期がありました。なかなかコツがつかめなくて締切ギリギリ冷や汗でした。

吉田 瞳



喜怒哀楽スタッフの一言欄に娘（結月）と一緒に載ったこと。妊婦姿の写真はその一枚だけ。そしてお客様から娘に色紙や贈り物などいただいたり…。感謝しかありません（涙）

佐々木 祥子



スタッフの一言欄の質問が季節やイベントのことについてが多いので、書いてる時に思い出を振り返って懐かしくなったりしていました。秘かに私の楽しみです。



## 二人連れれの孤独

やぎもととももと  
柳本々々

大学の頃、Kさんという先輩とずーっと一緒にいた。彼はものすごく文学ジャンキーなひとで、歩きながら、本を読んでいた。なに読んでるんですか、ときいても教えてくれな。ヴァレリーの名前がちらっとみえた。年はひとまわり離れていた。どうしてこんなに大学にいらしているのか。よくわからなかった。聞きもしなかった。俺はもう終わったにんげんだから、とよく言っていた。本で顔を隠しながら。ときどき、少し、こつちをみた。意を決する感じで。

わたしはKさんと早稲田の夜の学食によく入り浸っていた。Kさんは慶應を放校処分になり（長くないすぎたんだと思う）、今度は早稲田に入っていた。Kさんが早稲田にゆくとともに、わたしも早稲田にゆく機会がふえた。早稲田は夜でも学生たちが多かった。夜のキャンパスで激しく輪になって踊るひとたちがいて、UFOでも呼んでいるようだった。「なにか呼んでますね」とわたしは言った。Kさんもみていた。早稲田のキャンパスからは巨大な星空がみえる。ちゃんと宇宙船が着陸する広さもある。当時の時間をわたしはすべてSFのように感じていた。ぜんぶSFだった。

ある日、とつぜんKさんがわたしに、やぎもとはこの本を読んだほうがいいとおもうよ、と紙に書いて渡してきた。リチャード・ブローティガンの『アメリカの鱒釣り』と書いてあった。聞いたことのない名前だった。ブローティガンはこのあとの人生でわたしがずーっと大事にしていく作家になる。でもそのときはそんなことはわからなかった。

柳本々々さんの2回目のエッセイは、バルザックに似たK先輩の思い出。自身をよく知るからこそ、人を怒れないというK先輩に共感する。今ごろ、K先輩はどこでどう暮らしているのか、風の便りで聞きたくなる。

Kさんは語学が好きでなつた。ニーチェを訳したものをみせてくれた。「この、この箇所の、『驚いた！ 今や、二人連れれの孤独なんだ！』っていいですね」とわたしは言った。「これ大事にします」とわたしは言った。

Kさんはえらそうにすることがまっただけだった。腕組みをしてるとこんなかみたことがなかった。いつもちよこちよこ、自分はこのなごこにたどりついたらどしどしかたないんだよ、という感じで神保町を歩いていた。「俺はしかたない人間だからひとのことを怒れない」と言っていた。「しぬかもしれない」とも。わたしも「そうですね。みんなしぬかも」と言った。Kさんはわたしを見ずに、どこも見ずに、「しなないほうがいいよ」と言った。わたしたちはドイツ料理の飲み屋にいた。メニューがよくわからなくて、大根サラダという食べ物を頼んだら、まるまる大根いっぽんがそのまま皿に乗ってきて、「どうするんです、これ？」とわたしは言った。「どうなってます」

「わからない」とKさんは言った。「でも、あるから。こういうこと。ある」

Kさんは、胸に手をあて強い意志を秘めた肖像画のバルザックに似ていた。みんながみんなそう思っていたらしく、バルザックに寄せたKさんの似顔絵がサークルの部屋にずーっと貼ってあった。強い風が部屋に吹き込んでくるたびに、ゆれて、はためいた。

2018.10-11. vol.100 (2018年10月10日発行/隔月発行)

●発行・印刷/株式会社ミュージック・コーポレーション

〒950-0801 新潟市東区津島7-29  
TEL 025-250-9555 FAX 025-250-9550

0120-819-395 Facebookもチェック

e-mail odp@eseihon.com / HP http://www.eseihon.com

郵便局口座番号 00530-4-81370 口座名 株式会社 ミュージック・コーポレーション

### 編集後記

この仕事を始めるきっかけとなった母の命日が17年前の9月8日、義父は9月10日、そして「あっちゃん」と可愛がってくれた義母が、間に割って入るように9月9日に亡くなり、9月は特別な月になった。わけもわからず「喜怒哀楽」を創刊した時には100号を迎えようなどとは、考えもしなかった。義父母とも喜怒哀楽の宛名シールを貼ったり封筒に詰めたりと、食堂のテーブルと一緒に手伝ってくれたことを思い出す。さよならだけが人生とはわかっているが、まだ未来がある。出会った方、出会う方、周りの人たち、そして一人となった父を大切に、幾度も9月を越えよう。心からの感謝とともに。(木戸敦子)